

地理知識の効用についての一考察

大 嶽 幸 彦*

(平成18年9月6日受付；平成18年10月31日受理)

要 旨

本稿は、40年近くの研究・教育生活のかたわら、地理学周辺の読書を通して得た地理知識の効用についての研究にさらに考察を加え、特に2005年から2006年にかけての1年間の最新著書・学会誌掲載論文等を中心にまとめたものである。

KEY WORDS

Utility of Geographic Knowledge 地理知識の効用 Non-geographer 非地理学者の一般人

1 は じ め に

筆者は Non-geographer 用に、地理知識の効用について、生活のための地理学の観点から書き下ろしで本にまとめたことがある¹⁾。この40年近くの間、研究や教育のかたわら読書してきた内外の著書や欧米の学術論文の中から、一般の読者に役に立つと思われる「地理知識」をまとめ、その効用を平易に解説したものである²⁾。殺伐な事件が起きるたびに、犯人は現場の地理に精通している旨の一行が報道記事の中に繰返され、地理という言葉がこのような使われ方で登場するたびにやりきれなさを長年感じてきた。それを打開すべく、地理を学ぶ楽しさ、面白さ、有効性を一般の人びとに知ってもらおうよう、執筆したのである。最初は論文にするつもりで資料を読み進めてはフロッピーに草稿を打ち込んできた。しかし、500点以上の本や論文を引用し、コメントをつけているうちに相当の分量になり、本に切り替えたのである。方法としては、著書や論文をいわばテキストとして読み、若干の論評を加えてゆくことにした³⁾。できるだけ多くの著者に登場してもらうため、同一書からの引用は原則として一回きりとし、かつ引用文は短くした。

しかし、40年近くにわたり読んできた著書や欧米論文を、原典にあたって読み直すとなると、手元がない文献は参照しにくく、引用できなかったものもある。特に神戸大学時代に公費で購入してきた著書が利用できなかったことが大きい。文献を取り寄せては時間がかかりすぎるからである。多くの著書・論文から数行の引用を連ねる方式のため、手持ちの文献が主体となった。しかし、個人蔵書の多くは研究の専門化を反映し、学術的過ぎて引用できないものもあった。また、購入当初は欧文の著書を拾い読みするのであるが、長い年月の間に日本語で欄外にメモを書き入れてない場合は内容を忘れていたり、タイトルから見逃したりしたものも出てきた。本の価格をできるだけ低く抑えるため、地理学書に多用される図表の挿入を少なくし

* 社会系教育講座

たこともある。地理知識の引き出しから生活に関する情報が得られるよう、項目ごとに書き出しが始まるようにも工夫したが、活字主体の文章が続くなど反省すべき点も見えてきた。

そこで、本稿は平成17年8月脱稿以降に目を通した本や欧米論文などを中心に、地理知識の効用についての考察をさらに進め、本よりも詳しく論じたものである。もとより、このワークはいわゆる学海という広大な海を前にして、二、三の小石を投げ込んだのに過ぎないのであるが⁴⁾。

2 地理知識の効用についての一考察

ここで、地理知識とは何かを詳しく議論することはしない。地理学の定義がさまざままでひと言で済まされないのと同じく、地理知識の定義も容易ではないからである。本稿では注で取り上げたような項目を一応、地理知識の内容と考えてゆく。最近、流行のGIS（地理情報システム）については、地理知識の一環とは考えるが、筆者は不案内なので取り上げることはしない。地理学の体系をほとんど学んだことのない研究者の参入も目立つが、GISの隆盛は本来の地理学の性格をゆがめないとも限らない。あまりにもそのスキルの強調には筆者は与しない。むしろ、ギリシャ・ローマ時代以来の伝統的な地理学が、長年展開してきた地理知識を対象にしているといつてよい。欧米文献を読んでいると、地理知識 Geographic Knowledge という用語は頻出して重要な地理学用語の一つと考えられる。しかし、わが国では軽く扱われがちで限定的な意味しか持っていない。ちなみに、広辞苑によれば、知識（Knowledge, Wissen）には、認識によって得られた成果、さらに厳密に言えば、原理的・統一的に組織づけられ、客観的妥当性を要求し得る判断の体系という意味もあり、単にある事象について知っていること、また、その内容という意味だけではない。日本語の知識という用語の響きには、言葉の重みが軽んじられがちな今日では、深みはないかの如くである。

拙著『地理知識の効用』は自然地理学の啓蒙書の紹介からはじめたが、池田 碩は地形と人間活動の観点から、5人の分担執筆者とともに図・表・写真を多く使いながら『地形と人間』をまとめている（2005）⁵⁾。19世紀の著作ではあるが、地理学の歴史に大きな影響を与えたフリードリッヒ・ラッツェル著『人類地理学』が由比濱省吾によって訳出された（2006）⁶⁾。千ページを超す大著であるが、著者のラッツェルは第1部、第1版の序文で次のように述べている。

「小著は歴史的・地理的境界領域の諸問題を精密かつ体系的に取り扱おうという要求のために、実用的に生まれたものであります」。

ラッツェルといえば、俗説環境決定論のレッテルを誤って貼られているが、その後の信奉者が環境を強調しすぎたための誤解である。訳者によれば、自然の人間に対する影響が間接的であることを強調しているし、人間の精神的存在を無視していたのではないという。第1巻が歴史学に適用した地理学の綱要、第2巻が人類の地理的分布であり、訳書は両巻を合本したものである。内容は様々なテーマが簡潔に記述されており、どのページを開いても興味がつきないし、ラッツェルの学識の深さ、博識傍証に圧倒される。当時、発行されていた主要著作の多くを参照・引用している点が本文から読み取れる重厚な書である。画期的な訳書といえる。

2.1 外国を学ぶ

二宮書店より『ヨーロッパ文化地域の形成と構造－』（T. G. ジョーダン＝ビチコフ／B.

B. ジョーダン共著、山本正三・石井英也・三木一彦共訳) が出版された (2005)⁷⁾。この書は『ヨーロッパ文化－その形成と空間構造－』(T. G. ジョーダン著・山本正三・石井英也訳, 1989)⁸⁾を、共著で写真や図も改訂して書き下ろしたものである。前著に引き続き、多数の興味ある図版が挿入され、キャプションや本文でわかりやすく説明しているので「ヨーロッパ地誌」の講義や演習にふさわしい内容になっている。筆者は前著の第9章、農村集落だけを詳しく講義で取りあげたことがあるが、今回の本では、章立てがなく本文の各所に分散して記述されているので扱いにくい。中藤康俊は現代中国の地域構造を日本で勤務する中国人研究者も含む6人の分担執筆者とともに、経済の改革・開放と国民生活の変貌、国民消費意識の変化と消費革命、国有企業の改革の地域的展開など、興味あるテーマでまとめている (2003)⁹⁾。横山昭市は「中国の省民性試論」の中で、中国側の文献と私見を交差させ、省民性－地方人の特性－をつぎのようにまとめている。すなわち、政治に敏感な北京人、実利的な天津人、実力派の河北人、働き者の山東人、実利的な山西人、足が早い上海人、熱血漢の湖南人、質朴な四川人、理屈好きな福建人、実利的な広東人、団結奮闘の客家人である。わが国の県民性を一言でいうことに似て問題がなくはないが、広大な中国の省民性が様ざまであることがわかる (2005)¹⁰⁾。長年、アフリカ、アジアの海外調査に従事してきた山縣耕太郎は、今回、カムチャッカ半島山岳地域における地生態学的研究の研究代表者として、報告書をまとめている (2006)¹¹⁾。さらに山縣耕太郎、他は同種の内容を英文の論説にもしている (2006)¹²⁾。環境地理学者の市南文一、他はトルコ、アナトリア高原東南部の地域計画の評価研究を行い、英文で報告している (2006)¹³⁾。山口守人、他は1980年と1997年間の韓国織物業と被服産業の危機と再建の問題を英文で論じている (2006)¹⁴⁾。

2.2 哲学と地理学

哲学者のエドワード S. ケーシーはフォーラム: 場所、空間、自己、と身体に関する内省に、「地理学と哲学の間: 場所－世界に存在することは何を意味するか」を寄稿し、冒頭に地理学者リチャード・ハーツホーン、エドワード・エルフ、エドワード・W. ソジャの言葉を引用し、最後に次のようにいう。「私たちには身体があり、景観の中で落ち着いているために、場所と自己は同様に豊かになり、持続できる。私たちは宿命的に属している、場所－世界の永遠の住民となることもできるのである。」(2001)¹⁵⁾。

空間よりも場所概念を重視しているのがわかる。なお同じフォーラムの中で、テレンス・ヤングは「場所が問題だ」として冒頭で短く論じている (2001)¹⁶⁾。山口幸男は内村鑑三、牧口常三郎、宮沢賢治の地理思想を析出し、その地理教育的意義についてまとめている (2004)¹⁷⁾。

2.3 関連科学と地理学

ウィリアム・A. コールシュは古代の地理学者、ストラボンの地理学に触れ、ストラボンのモデルが現代世界におけるエクメーネを解釈する地理学者の仕事をあらためて適切なものとしたとし、最近の英語圏での業績を紹介している (2005)¹⁸⁾。

2.4 地理学の方法

わが国では音が地理学の対象とされることは少ないが、山岸美穂は「地理教育とサウンドス

ケーブー豊かな生活感覚と感性を磨くためにー」という論考の中で、サウンドスケープの定義から始め、感性行動学の視点とアプローチ、音響コミュニティー、基調音・信号音・標識音、音環境資産を論じている(2005)¹⁹⁾。實 清隆は一人で人文地理学的なものの見方を養うこと、人文地理学が取り組んでいる諸課題を取り上げ、考えさせることの2点から、一般市民に役立つテキストを書き上げている(2006)²⁰⁾。この手の本は多くの分担執筆者が書くため、章ごとに「色」が異なり、内容に一貫性を欠く点を反省したためであるという。

2.5 過去と歴史地理学

グザヴィエ・ド・プラノール著・手塚 章・三木一彦訳『フランス文化の歴史地理学』は、フランス地理学派の歴史地理学的研究成果の集大成をはかった1988年発行の原著を、8年かけて共訳した成果である(2005)²¹⁾。フランスの形成、フランス国土の伝統的空間組織、近代のフランスー空間構造の求心化と多様化ーの三部構成で、一つひとつのテーマを詳細に、しかもあきさせない記述でなされている。短文で流麗な文章が歴史書、文学書、詩集などの引用を多用しながら、地理的な記述を進めている。本書はパリ・ソルボンヌ大学における学部専門課程の講義ノートにもとづいているという。筆者は本書の文献紹介を試みた(2006)²²⁾。フランスで発行される大著はこの種の講義ノートに基づいていることがよくある。ゆったりとした口述式の講義が部厚い著書の刊行を可能にしているのである。日本でいえば、文学部系・法学部系の講義は口述式のものが多いが、草稿を授業にかけ本にする試作段階にしていると考えられなくもない。筆者はこれまで既往論文をまとめて本にしてきたので、この方式を取ったことはない。教える機器が格段にふえ、教える技術も教員評価の対象とされる今日では、ノート口述の講義方式は果たして可能なのか、疑問の余地無しとしない。

2.6 地図

M. C. カリーは「地図のない世界地理に向けて：トレミーと郵便番号からの教訓」という文字どおり地図のない論説の中で、空間や場所の概念を読み直す背景に逆らって、今日生起している多くが空間ではなく、場所の問題であることがわかっていると述べている(2005)²³⁾。空間から場所概念への回帰ともいえるわけではない。中村和郎編『地図からの発想』はカラー地図をふんだんに使い、一テーマ見開き2ページの構成で52人の執筆者が様々な話題を提供している。地図をよむ、地図をつくる、地図をおもうの点から構成されており、役に立つ本であるが、取り上げられたテーマに一貫性がなく資料集の域を出ないのが難点といえれば難点である(2005)²⁴⁾。しかし、地理教育の現場では活用される本の一冊である。森川 洋は『ドイツナショナルアトラス、(第5巻)、村落と都市』の刊行を紹介する中で、ドイツの地理学者が協力して立派なアトラスを刊行したことを、地理学の社会的貢献として高く評価している(2005)²⁵⁾。長年合衆国の地理教育を追究している田部俊充は、米国をモデルとした入門期における地図指導を、幼稚園教育、小学校教育について論じている(2004)²⁶⁾。朝倉啓爾、志村 喬、他は、佐川交通社会財団の研究振興助成を得て、「上越市高田地区における「交通事故危険地図」の作成による児童・生徒の交通安全のための基礎的研究」という画期的な報告書をCD-ROM付で作成した(2006)²⁷⁾。市内18の小学校別に、「交通事故危険地図」が別紙で作成されており、廊下にでも貼れば、日々児童・生徒の注意を喚起させることになるだろう。なお、志村 喬は科学研究費の報告書で、「地図嫌いの発生要因の解明と地理教育による改善方法の検討」をまとめ

ている (2005)²⁸⁾。

2.7 写真

長年、優れた地理写真を撮り続けた石井 實は、2005 年 11 月に新宿で写真展「東京の山村、奥と峰の 30 年」を開催するとともに、46 ページの興味ある冊子をまとめている。写真展に関する新聞記事も 2 件掲載されている (2005)²⁹⁾。高橋伸夫・内田和子・岡本耕平・佐藤哲夫編『現代地理学入門 身近な地域から世界まで』は多数の写真を使い、地理学が楽しく学べるように工夫してある (2005)³⁰⁾。大学用テキストとして適切な本の一冊である。

2.8 旅と輸送手段と観察眼

ジェレミー フォスターは「北に向かって、上のほうへ：列車の旅の物語、白人の南アフリカ国家への旅程」という論説の中で、1890 年代に初めて現れたケープからランドへの鉄道の旅の記事のひとつを吟味している (2005)³¹⁾。旅と鉄道は切っても切れぬテーマであり、地理学雑誌にもたまに登場する。しかし、高速化し騒音から守るための防音壁やトンネルが多くなった今日の鉄道では、ゆっくり車窓観察をするゆとりもない。多くの乗客は週刊誌を読むか居眠りするかで、観察という貴重な機会が失われ、地理好きを減らしてゆく。時間はかかるが、各駅停車には、旅の醍醐味がまだ残されている。

2.9 異文化体験

拙著では、J. R. ハルマンの「地理学はいずこへ」という論説を引用したが、その後マーク・ペンドラスがその論説への批判的なコメントを寄せている。ハルマンの擁護する市場むけのアプローチが、地理学の有する批判的問題提起を危くしてしまうと議論している (2006)³²⁾。

2.10 フィールドワーク

平成の大合併が市町村の数を大幅に減らし、調査がしにくくなったことについては拙著の中で言及した。上越地方では町村が消えてしまったため、平成 17 年度の上越教育大学「地域研究実験」(佐藤芳徳と実施)は出雲崎まで出かけざるをえず、海水浴客を横目に見ながら参加者は汗を流していた。しかし、地理を専攻にしてこなかった院生にも、合宿形式のフィールドワークは勉強になるようであり、修了後も印象に残る授業の一つとなっている。報告書は毎年発行し、今年度で 20 周年を迎えた。地理学では臨地研究といい、臨床研究のひとつとわれわれは考えている。岩本通弥と小野寺淳が編集した『新考 山の人生 柳田國男からの宿題』は、民俗学と地理学の領域で膨大な著作を残した千葉徳爾の自伝やフィールドワークに取り組んだ背景を述べている。千葉徳爾のユニークな問題意識やひらめきがどのようにして生まれたのか、自学を詳しく説明していて、これから研究に進もうと考えている若い人びとに示唆することの多い本である (2005)³³⁾。巻末には 683 点に及ぶ業績目録と略年譜がついており、文献検索に便利である。なお、茨城県大洗町にある「幕末と明治の博物館」に、千葉徳爾の蔵書・フィールドノートなどが遺族から寄贈され、千葉文庫(仮称)としていずれ保存・公開の予定という。

2.11 地理学はどこにいったか

シュテファン・ルルワはパリ・マレー地区を中心に集まっているゲイについて、実態調査を

行ない、ゲイによる商店や匿名の出会いの場所を図化し、最後に空間組織図を描いている(2005)³⁴⁾。併せ小さなゲッターと化していることも指摘している。この研究テーマはフランスでは忘却されてきたという。

2. 12 地理学に求められるもの

ウラジミール V. アネンコフとジョージ J. デンコは合衆国と旧ソ連の著名な地理学者に、科目としての地理学の本質、地理教育、地理学の妥当性、現代のグローバル問題への地理的アプローチに関して14の設問を用意し、回答の主要部分を回答者ごとに並列させ、若干の解説を加えている(1992)³⁵⁾。旧ソ連の地理学者が人間と環境との関係を重視するのに対し、合衆国の地理学者はバランスが取れ、やや社会科学的なアプローチを取ることを指摘している。ヤン オーマンとキルステン シモンセン編は『北欧からの声、北欧の人文地理学における新しい傾向』と題し、生産、社会制度と地方の開発、福祉国家、計画と人文地理学、空間性、アイデンティティーと社会的慣習、自然、景観と環境、差異、差別と権力の観点から16のテーマを設定し、22人の執筆者が協力している(2003)³⁶⁾。A. バッチマーはエストニアの地理学者、エドガー・カント(1902 - 1978)を何回も取り上げてきたが、生誕百年を祝う機会に講演している。バッチマーによれば、エドガー・カントは後に隆盛を見た環境知覚、時間地理学、景観と文化的アイデンティティーへの先駆的研究をおこなった者として紹介されている(2005)³⁷⁾。彼の生涯は未完成交響曲のようであるとも結んでいる。付録として、彼の年表と主要活動、主な研究論文が提示され、先駆者としての概念、すなわち意味、メタファー、環境、地平線の観点から整理している。地理学史上での発掘論文といえようか。

T. J. バーンズは第2次世界大戦下のアメリカ合衆国において、戦略サービス局の研究と分析部門に協力したR. ハーツホーンを初めとする地理学者たちが、どのような任務についていたかを分析している(2006)³⁸⁾。ハーツホーンはあらゆる研究出版物を監視する計画委員会の長であったし、他の地理学者は戦略的地域レポートを作ったり、地図製作の重要な立場に立っていたのである。A. B. マーフィーはアメリカ地理学者協会の会長演説の中で、公開討論において地理学の役割を高めるように主張している(2006)³⁹⁾。地理学が歴史上周縁部にあったこと、現代の主要な話題に地理学研究を結びつけるような目に見える研究が不足していたため、政治問題や社会問題での幅広い討論に地理学が参加できなかったとして、その改善案を提示している。論文のキーワードは、地理学の奉仕活動、地理思想、公開討論、地域地理学、研究の戦略である。合衆国での地理学専攻の卒業生は、“ホット”な技術、地理情報システム(GIS)の導入にもかかわらず、93 - 94年度の4,449人をピークに減っており、2001 - 2002年度には3,925人となり、12%の減少である(AAG, Guide 2003 - 2004, 2006)⁴⁰⁾。そのため学部専攻として学生に地理学をとらすような努力が続いている。L. E. イースタヴィル、B. J. ブラウンとS. カールドウエルは、教えることに秀でることが地理学の学生を集める鍵であるとしている。また将来の職業として地理学がむくわれるかどうか、親を説得することも重要であると考えている。雑誌『地理』第51巻第6号には、新堀 毅による「地理がなくなる? 地理教師がいなくなる?」という衝撃的な記事が掲載されている(2006)⁴¹⁾。地理がカリキュラムからなくなるということは、生徒が的確な世界像を描くことや異文化理解能力を身につける機会を奪うことになる、新堀は主張している。Geografiska Annaler, 88 B (2)は地理学と権力、地理学の権力について特集を組み、デヴィッド ハーヴェイは「創造的破壊としての

新－リベラリズム」を寄稿している（2006）⁴²⁾。その論考の中では、民営化、財政化、再配分、民主的選択が論じられている。

2. 13 地理的興味の養成

酒川 茂は教育地理学の立場から、小学校を中心に実証研究を重ね、学校が地域社会の拠点になることを、学校の設置統廃合と校区の形成過程、小学校児童の学習と遊びからみた学校と地域社会、施設と機能の開放からみた学校と地域社会、海外における学校と地域社会の観点から整理し、博士論文にまとめている（2004）⁴³⁾。井田仁康は、地域とかかわりをもつ理論・実践に関する著書や論説を次々に公表してきたが、このたび既に発表してきた論考に加筆・修正を加え、『社会科教育と地域』に関する本を著した（2005）⁴⁴⁾。本書は理論・外国研究・内外の地域調査・授業実践と、多角的に社会科教育を分析したところに特徴がある。しかし、地理で知られた出版社からの刊行でないため、大学等にあまり納入されていない。山口幸男・山本友和他編著『社会科教育と地域・国際化－群馬、新潟からの発信－』は、第1章で「地域の国際化と社会科教育」と題し、群馬県東部で、外国人（特にブラジル人、ペルー人）の多い地域を事例として取り上げている（2005）⁴⁵⁾。それと関連して、上越教育大学社会系教育講座を中心に、群馬県太田市・大泉町を対象とした教材開発のためのリカレント・ツアー・プログラム調査報告書が書かれた（2006）⁴⁶⁾。志村 喬はイギリスの地理教育を精力的に分析してきたが、『ナショナル・カリキュラム地理』における技能について、1991年版、1995年版、2000年版を比較検討している（2004）⁴⁷⁾。全国地理教育研究会は、グローバル化する現代世界、人びととくらし、未来に向けての課題、新しい地理授業のすすめ方、開発教育がわかるの観点から、新しい地理授業を提案している（2005）⁴⁸⁾。千田 稔は叢書『地球発見』の第1巻に、『地球儀の社会史』を書いたが、地球儀のなかった日本の外務大臣執務室のエピソードを紹介している（2005）⁴⁹⁾。地球儀の誕生、日本史の中の地球儀、地球儀という表象、征服の野望と地球儀、地理教育と地球儀の観点から叙述を進め、地球儀というメディアで締めくくっている。多くの地球儀の写真が挿入されているので、参考になる。マーク C. ジョーンズは、教師がおもしろく、適切で教え方がうまい授業を成功させるか失敗させるかで、後の教育歴で地理学を引き続いてとるかどうかに影響するので、生徒が受講する最初の地理コース（日本でいえば中学校1年の地理的分野の授業、筆者注）が極めて重要であると、コメントしている（2006）⁵⁰⁾。

2. 14 地誌学研究

斎藤 功は信州の地理山脈として、田中啓爾、三澤勝衛、市川健夫を代表的な地理学者として挙げ、松本盆地に対する三者の研究を紹介している（2006）⁵¹⁾。結論としては文化層序という概念を紹介している。文化層序とは、ある時代の植物や花粉が池に堆積して地層をなすように、ある地域に流入した時代の文化はそれが建造物であれ書物であれ文化財であれ、何らかの痕跡を考えることである。文化層序の縞模様と題した図1－3は特に興味深い。以下、松本盆地の例で、中心都市の構造変容、地域生態の空間的差異－盆地底から山地にかけて－、盆地内の空間的結合について、フィールド・ワークの手法でまとめたものである。筑波大学大学院の地誌学野外実験の現地調査を基に、『地域調査報告』に掲載した院生・教員の論文を中心に編纂している。しかし、既存の論文をそのまま転載したのではなく、地域性や風土性及び文化層序を念頭に置き、空間構造、地域生態、発展階梯と多様性という観点から再編されている。斎

藤地誌学の集大成といえる著作である。『アメリカ大平原：食糧基地の形成と持続性－増補版－』（矢ヶ崎典隆・斎藤 功・菅野峰明）が刊行された（2006）⁵²⁾。補章として、変化し続ける大平原を新たに設けている。

2. 15 環境危機と地理学

The Geographical Journal の第 171 巻、第 4 部（2005 年、12 月号）はインド洋の津波後 1 周年を特集し、4 人の研究者が地理学からのコメントを行っている（2005）。雑誌『地理』598 号（第 50 巻、第 6 号）は新潟県中越地震を特集し、中越地震と活断層（鈴木郁夫）と地域特性（山縣耕太郎）の現地報告と、中越地震にまなぶと題したコラムを載せている（2005）。なお鈴木郁夫は既往論文をまとめた『新潟の地形』を刊行している（2005）⁵³⁾。ドイツの学会誌「地球（DIE ERDE）」は景観の乱された現状と開発の特集号を組み、主にドイツの鉱山地域の例で、環境変化の例を取り上げている（2005）⁵⁴⁾。この特集号に寄稿された論文は、景観レベルでの生態－機能的側面と土壤地理学的側面を統合している。

2. 16 地理的想像力を活用して

拙著の中では、J. K. ライトの「未知の土地（テラ・インコグニタ）：地理学における想像力の位置」を取り上げたが、I. M. ケイグレンはライトの有名な提唱、Geosophy（地に対する愛とでも訳せようか、筆者注）の概念を中心に、J. K. ライトの知的生涯を分析している（2005）⁵⁵⁾。その際、未公表の草稿も詳細に検討し、想像力と知覚の相互作用に焦点を当てている。カリフォルニア大学ロサンゼルス校のエドワード・W. ソジャは『第三空間、ロサンゼルスと他の現実的かつ想像された場所への旅（邦訳名、第三空間、ポストモダンの空間論的転回）』を 1996 年に出版したが、加藤政洋によって翻訳された（2005）⁵⁶⁾。「第三空間」とは、つねに移り変わる観念・出来事・現象・意味の環境を何とかして捉えようとする果敢な試案であり、また柔軟に対応する語であるという。現実の物質的な世界に焦点を合わせる「第一空間」、想像上の空間性の表象を通じてこの現実性を解釈する「第二空間」に対して、現実かつ想像上の場所の多様性へと向かう旅が「第三空間」である。本書の内容は、アンリ・ルフェーブル、驚異の旅、空間性の三元弁証法、差異がつくる空間の探究、周縁に関するノート、「第三空間」の開放性を強化する、ヘテロトポロジー、フーコーと他者性の地理歴史学、歴史主義に関する空間（論）的批評の再現＝表象、追想（要塞都市 LA）へのヘテロトポロジー、外心都市の内側、ポストモダン世界の日常生活、ちょっとした戸惑いを刺激として、アムステルダムとロサンゼルス同時代の比較と、魅力ある章立てが並んでいる。内容は時に難解の書である。デヴィッド・ハーヴェイ著・大城直樹・遠城明雄訳『パリ モダニティの都市』は、第二帝政期からパリ・コミューンまでの 19 世紀のパリを対象とした、地理的想像力を刺激する書である。本書の中では、ドーミエを中心とした多数の諷刺画や図版、当時の写真、バルザックなどの諸作品が、悲惨な世相や人びとの様相を興味深く活写している（2006）⁵⁷⁾。地理のみならず、経済、社会、都市計画、文学、芸術などの文献を参照しながら叙述を進めていて読み応えがあり、著者の学識の深さに驚嘆した。

3 お わ り に

『地理知識の効用』では、23 ページにわたる引用文献からの引用を A 5 版 114 ページの本文の中に盛り込むため、引用は短く、説明は簡潔をこころがけたが、結びの部分についても同様に短い引用であるため、十分な意を尽くせなかった。しかし、引用の箇所について、その都度論評を加えることはそれほど容易ではない。取り上げた著者の考えと筆者のそれが一致することはたとえあっても少ないからである。本書が舌鋒鋭く引用文を斬り捨ててゆくことはせず、むしろ評価する方向で全体を書きすすめてきたのは、一般の人びとに地理の楽しさ、面白さ、有効性を伝えることに基調があったためである。筆者は平易をモットーに書き進めたのであるが、もっとページ数を費やすべきであったというご批判も受けている。文献の中には絶版で容易に手に入りにくくなったものもあるが、若い人びとに読んでいただきたいものも含まれている。その意味で引用文献は参考文献として読者の参考となりうると考える。本書が誇れるのは引用した 531 点もの文献一覧にあるといってもよいかもしれないからである。というのも、あることを論ずるには、相当の文献が本来は必要である。しかし、効率化が重んじられ競争的な生き方が前面に出てきた今日では、軽く済まされ見捨てられがちな文献渉獵である。これから地理学の道に進む若い学徒には、これまでに出版された地理学書を少なくとも一瞥していただきたいものである。特に、古典は読めば読むほど得ることも多く、味読したいものである。

拙著『地理知識の効用』を 2005 年 8 月初めに脱稿した後、古今書院との出版交渉に入り、フロッピー入稿と図版が少ないため 11 月中旬には公刊となった(発行年は 2005 年 12 月 1 日)。しかし、その間、新たに発行された書籍・論文や、筆者が見落としていた文献が目立つようになり、さらに地理知識の効用について考察を加えたものである。採択の基準は拙著と同一とし、著書を中心に論文については原則として欧米の学術論文とした。国内についてもいわゆる学会誌の論稿を主とした。そのように限定しないと時期が無いからである。ただし、海外研究にあっては、紀要に掲載されたものも取り上げた。もとより、地方にあっては文献の収集には時間がかかるし、目配りがきかないという限界がある。しかし、貴重な本・抜き刷りを送ってくださった多くの諸先生方に今回も学恩に感謝するものである。最後に、対象にした文献は 2006 年 7 月までの約 1 年間に目を通すことのできた刊行物で終わりにした点を記しておきたい。本稿脱稿後、合田昭二による「産学連携」の取り組みのひとつとして、岐阜既製服問屋町における店舗の配置と変動に関する分担執筆書を手にしたので、言及しておきたい⁵⁸⁾。

注

- 1) 大嶽幸彦 (2005) : 地理知識の効用, 古今書院, 148 P

本書については西脇保幸の書評がある。西脇は本書を地理学普及のための啓蒙書の一冊と捉えている。

西脇保幸 (2006) : 書評 大嶽幸彦 : 地理知識の効用, 地理学評論, Vol. 79, No. 9, pp. 498-499

短評ではあるが、土屋正孝は本書の紹介を「茗溪」第1050号, p. 19, 2006年でおこなっている。

2) 筆者の考える「地理知識」の引き出しは以下のとおりである。

風土と地理学, 外国を学ぶ, 哲学と地理学, 関連科学と地理学, 地理学の方法, 文学と地理学, 過去と歴史地理学, 地理知識の普及, 地図, 写真, 旅と輸送手段と観察眼, 三澤勝衛と臨地研究, 車窓観察と途中下車, 異文化体験, フィールドワーク, 地理学はどこに行ってしまったか, 地理学に求められるもの, 地理的興味の養成, カール・O・サウアーと地誌学, 地誌学研究, 環境危機と地理学, 地理的想像力の育成, 科学者と存在論, 地理学と実存主義, 再び地理的想像力を活用して, などである。これ以外に「地理知識」の引き出しがないという意味ではもちろんなく, 筆者の長年の地理学関係の読書が以上のように整理されるというに過ぎない。昨今はやりのGIS (地理情報システム) については不案内なので, 取り上げていない。

3) テクストを考える際, 参考になったのは次の書である。

ロラン・バルト著・沢崎浩平訳 (1997): テクストの快楽, みすず書房, 167P

イヴァン・イリイチ著・岡部佳世訳 (1995): テクストのぶどう畑で, 法政大学出版局, 243P

4) 学部1年の一般教育科目「漢文学」の講義で, 鎌田 正教授がニュートンの言葉として紹介された記憶がある。専門での講義よりも一般教育科目での耳学問が研究上のアイデアと後年なっていることを考えると, 教養部の廃止や一般教育科目の削除は如何なものであろうか。無駄と思われた勉強が意外とあとで役立つのである。教養部での10年間の筆者の講義が準備を含め, 『地理知識の効用』を20年後に書かせる下地になっているのである。

5) 池田 碩編著 (2005): 地形と人間, 古今書院, 175P

6) フリードリッヒ・ラッツェル著・由比濱省吾訳 (2006): 人類地理学, 古今書院, 1050P
原著第1巻は1882年, 第2巻は1891年に発行されている。訳書は一冊に合本されている。

7) T. G. ジョーダン=ビチコフ/B. B. ジョーダン共著, 山本・石井・三木共訳 (2005): ヨーロッパ文化地域の形成と構造-, 二宮書店, 498P

8) T. G. ジョーダン著・山本・石井訳 (1989): ヨーロッパ文化-その形成と空間構造-, 大明堂, 513P

9) 中藤康俊編 (2003): 現代中国の地域構造, 有信堂, 199P

10) 横山昭市 (2005): 中国の省民性試論, 愛媛大学人文学会『人文学論叢』第7号, pp. 1-12

11) 山縣耕太郎編 (2006): カムチャッカ半島山岳地域における地生態学的研究, 北海道大学低温科学研究所一般共同研究報告書, 122P

12) Tosio Sone, Kotaro Yamagata et al. (2006): Distribution of permafrost on the west slope of Mt. Ichinsky, Kamchatka, Russia, Bulletin of Glaciological Research, 23, pp. 69-75

13) Enver E. Dincsoy, Fumikazu Ichiminami (2006): An Assessment of the Southeastern Anatolia Region in Turkey in terms of the Sustainable Development Targets, Journal of The Faculty of Environmental Science and Technology, Okayama University, Vol. 11, No. 1, pp. 75-81

14) Morito Yamaguchi et al. (2006): Geographical Extension of Productive Forces and Intensive Accumulation Regimes -Crisis and Restructuring of the Korean Textile and Clothing Industry between 1980 and 1997-, 尚絅大学研究紀要, 第29号, pp. 53-74

15) Edward S. Casey (2001): Between Geography and Philosophy: What Does It Mean to

- Be in the Place-World? A. A. A. G., 91 (4) , pp. 683-693
- 16) Terence Young (2001): Place Matters, A. A. A. G., 91 (4) ,pp. 681-682
- 17) 山口幸男 (2004):内村, 牧口, 宮沢の地理思想に関する地理教育論的考察, 新地理, 第52巻, 第3号, pp. 56-64
- 18) William A.Koelsch (2005): Squinting back at Strabo, The Geographical Review, 94 (4) , pp. 502-518
- 19) 山岸美穂 (2005): 地理教育とサウンドスケープー豊かな生活感覚と感性を磨くためにー, 山口・清水編『これが新しい地理授業の現場だ』所収, 古今書院, pp. 207-218
- 20) 實 清隆 (2006): 大学テキスト 人文地理学, 古今書院, 79P
- 21) グザヴィエ・ド・プラノール著・手塚 章・三木一彦訳 (2005): フランス文化の歴史地理学, 二宮書店, 627P
- 22) 大嶽幸彦 (2006): 文献紹介; 前掲『フランス文化の歴史地理学』, 歴史地理学, 48-2, pp. 44-45
- 23) Michael R. Curry (2005): Toward a Geography of a World Without Maps: Lessons from Ptolemy and Postal Codes, A. A. A. G., 95 (3) , pp. 680-691
- 24) 中村和郎編 (2005): 地図からの発想, 古今書院, 128P
- 25) 森川 洋 (2005): ドイツナショナルアトラスの刊行とその意義ーライブニッツ地誌研究所編 (2002): 『ドイツナショナルアトラス, (第5巻) 村落と都市』の紹介を中心にー, 地理科学, 第60巻 第4号, pp. 66-77
- 26) 田部俊充 (2004): 入門期におけるジオグラフィカル・スキルの日米比較と課題ー米国をモデルとした入門期の地図指導ー, 地理科学, 第59巻, 第3号, pp. 4-11
- 27) 朝倉啓爾・志村 喬, 他 (2006): 上越市高田地区における「交通事故危険地図」の作成による児童・生徒の交通安全のための基礎的研究【小学校編】, 上越教育大学学校教育学部, 朝倉研究室, および附図19葉, CD-ROMつき, 400P
- 28) 志村 喬編 (2005): 地図嫌いの発生要因の解明と地理教育による改善方法の検討, 平成15~16年度科学研究費補助金研究成果報告書, 志村 喬, 94P
- 29) 石井 實 (2005): 「東京の山村」, 奥と峰の30年, 石井 實, 46P
- 30) 高橋・内田・岡本・佐藤編 (2005): 現代地理学入門, 身近な地域から世界まで, 古今書院, 83P
- 31) Jeremy Forster (2005): Northward, upward: stories of train travel, and the journey toward white South African nationhood, 1895-1950, Journal of Historical Geography, 31, pp.296-315
- 上越教育大学への寄贈図書の中に, 次の興味あるエッセーを見つけたので学会誌ではないが参考までにあげておきたい。
- 山岸 健 (2005): 旅することと人間と風景ー世界と人間の世界体験ー, 大妻女子大学人間関係学部紀要, 人間関係学研究 6, pp. 189-210
- 32) Mark Pendras (2006): Whither Critical Inquiry?, The Professional Geographer, 58 (1) , pp. 99-103
- 33) 千葉徳爾 (2005): 新考 山の人生 柳田國男からの宿題, 古今書院, 362P
- 34) Stephane Leroy (2005): Le Paris gay. Eléments pour une géographie de l'homosexualité, Ann.Géo., No 646, pp. 576-601

- 35) Vladimir V. Annenkov and George J. Demko (1992): The Art and Science of Geography, U. S. and Soviet Perspectives, Westview Press, 169P
- 36) Jan Ohman and Kirsten Simonsen (2003): Voices from the North, New Trends in Nordic Human Geography, ASHGATE, 326P
- 37) Anne Battimer (2005): EDGAR KANT (1902-1978): A BALTIC PIONEER, Geografiska Annaler, 87B-3, pp.175-183
- 38) Trevor J. Barnes (2006): Geographical intelligence: American geographers and research and analysis in the Office of Strategic Services 1941-1945, Journal of Historical Geography, 32-1, pp. 149-168
- 39) Lawrence E. Estaville et al. (2006): Geography Undergraduate Program Essentials: Recruitment, Journal of Geography, 105, pp. 3-12
- 40) Alexander B. Murphy (2006): Enhancing Geography's Role in Public Debate, A. A. A. G. 96 (1), pp. 1-13
- 41) 新堀 毅 (2006): 地理がなくなる? 地理教師がいなくなる?, 地理, 51巻6号, pp. 22-27
- 42) David Harvey (2006): Neo-liberalism as creative destruction, Geografiska Annaler, 88 B (2), pp. 145-158
- 43) 酒川 茂 (2004): 地域社会における学校の拠点性, 古今書院, 317P
- 44) 井田仁康 (2005): 社会科教育と地域-基礎・基本の理論と実践-, NSK 出版, 296P
- 45) 山口・山本・黒崎・佐藤・原口編著 (2005): 社会科教育と地域・国際化, あさを社, 287P
- 46) 上越教育大学社会系教育講座編 (2006): 「地域の国際化」に関する教材開発のためのリカレント・ツアー・プログラム調査報告書, 2005年度学長裁量経費, 59P, 上越教育大学社会系教育講座
- 47) 志村 喬 (2004): 英国『ナショナル・カリキュラム (2000年版)』開発とジオグラフィカル・スキル, 地理科学, 第59巻, 第3号, pp.149-156
- 48) 全国地理教育研究会編 (2005): 地球に学ぶ新しい地理授業, 月刊地理8月増刊, 144P
- 49) 千田 稔 (2005): 地球儀の社会史, 叢書『地球発見』第1巻, ナカニシヤ出版, 191P
- 50) Mark C. Jones (2006): High Stakes Teaching: The First Course in Geography, Journal of Geography, 105, pp. 87-89
- 51) 斎藤 功編著 (2006): 中央日本における盆地の地域性-松本盆地の文化層序-, 古今書院, 276P
- 52) 矢ヶ崎・斎藤・菅野編著 (2006): アメリカ大平原: 食糧基地の形成と持続性-増補版-, 古今書院, 225P
- 53) 鈴木郁夫 (2005): 新潟の地形, 鈴木郁夫, 358P
- 54) Editorial (2005): Disturbance and Development of Landscapes, DIE ERDE, 136 Jahrgang, Heft 1, pp. 1-2
- 55) Innes M. Keighren (2005): Geosophy, Imagination, and terrae incognitae: exploring the intellectual history of John Kirtland Wright, Journal of Historical Geography, 31, pp. 546-562
- 56) エドワード・W. ソジャ著・加藤政洋訳 (2005): 第三空間 ポストモダンの空間論的転回,

青土社, 423P

57) デヴィッド・ハーヴェイ著・大城・遠城訳 (2006): パリ モダニティの首都, 青土社, 463P

58) 合田昭二 (2006): 岐阜既製服問屋町における店舗の配置と変動, 『岐阜における地域経済の研究』所収, 岐阜大学地域科学部西村貢研究室, pp. 100-142

参考文献

①大嶽幸彦 (1980): 国際化時代の地理学, 大明堂, 125P

②ヴィクトール・プレボ著・大嶽幸彦訳 (1984): 地理学は何に役立つか, 大明堂, 117P

③大嶽幸彦 (1990): 旅と地理思想, 大明堂, 139P

④大嶽幸彦 (2003): 人文地理発想法入門, 大明堂, 109P

A Reflection On Utility of Geographic Knowledge

Yukihiko OHDAKE *

ABSTRACT

The object of this research consists of a reflection on 『Utility of Geographic Knowledge』 by Yukihiko Ohdake, which analysed the author's geographic knowledge in near 40 years's research and education life, referring to about 530 books and dissertations.

* Division of Social Studies, Department of Humanities and Social Sciences.